93. 巨大肝血管腫とエヒノコックス症の2症例

弘前大学　松永内科
小松　良彦　　鹿野　真勝　　富田　重照
佐藤　　東

^{198}Au colloid を使用した肝シンチグラムで，最近興味ある2例を経験したので報告する．

症例1　48才　男性

昭和45年4月，咳嗽，微熱を主訴として当科入院．胸部 X－P にて両肺野に多発性の円形陰影を認め，肺結核，悪性腫瘍の肺転移を中心に検索を進めるも，確定診断をえられず，経過観察していたが，入院当初より好酸球増加が持続し，寄生虫症も否定できず皮内反応を施行した所，エヒノコックス陽性，更に同補体結合反応も陽性を示した．腹腔鏡では，肝左葉深部に隆起性病変を認めた．肝シンチグラフィーを施行した所，ほとんど左葉全体を占める Space Occuping lesion を示した．開胸による肺生検の結果，エヒノコックス症と診断された．

症例2　50才　女性

昭和46年3月頃より，右上腹部内腫瘤に気付き，以後増大の傾向あり，また同部の圧迫感も伴い，某院に入院．腹腔動脈血管造影で，右肝動脈の圧排伸展造影剤の早期貯溜像を示した．肝シンチグラフィーを施行した所，ほぼ右葉全体を求める2個の円形 Space occuping lesion を認め，その辺縁が鋭い所から良性の嚢腫が疑われた．開腹術の結果，肝右葉の巨大血管腫と判明した．

94. 日本住血吸虫症における ^{131}IMIAA 法による肝・脾スキャンの検討

東京大学　第2内科
千葉　一夫　　山田　英夫　　飯尾　正宏
市立甲府病院　　井内　正彦

日本住血吸虫症（日住症）の ^{198}Au による肝スキャンの脾影の出現の意義については，先に報告した．今回は日住症157例に ^{131}I MIAA 法による肝・脾スキャンを実施，157例中147例には同時に ^{198}Au コロイドスキャンも行ない，両方法による脾スキャン像の価値と臨床的意義について検討した．〔方法〕1）対象：日住症157例，2）^{131}I MIAA 600μCi 静注後，肝・脾スキャン実施，3）^{198}Au 400μCi 静注後，肝スキャン実施，4）両スキャンの脾影の Splenic Score を Castell らの方法より算定，脾腫は Grade＋～卅＜ に評価，肝障害度は強い順にⅢ，Ⅱとし，Ⅰは正常とした．〔結果および結論〕1）同一症例に ^{198}Au 法と ^{131}I MIAA 法を試み，Splenic Score, 脾腫の Grade の面より比較．すなわち両法の Splenic Score の一致例は46例（31.3%）に対し ^{131}I MIAA 法で ^{198}Au 法より Splenic Score を高値に示した 100例（68%）で，逆の場合は1例（0.7%）に過ぎない．脾腫の出現率は ^{131}I MIAA 法 35.4%，^{198}Au 法 22.4% と前者で高く，脾臓の描出の点で ^{131}I MIAA 法の方がすぐれている．2）^{131}I MIAA 法による脾スキャン像の検討：a）日住症の脾腫の出現頻度は男性 31.8%，女性 42.6%と後者が高い．b）高い Splenic Score（2.3）を示す症例と肝障害度との関係：男性では Grade Ⅲ が50%と高く，女性では Grade Ⅲ は 7.4% で大部分は Grade Ⅰ と正常であった．同様の傾向は脾腫と肝障害度との関係でも認められた．c）高い Splenic Score（2, 3）を示す症例の肝組織像との関連では，男性では肝硬変52.8%，女性では肝硬変8%と少なく肝組織像正常40%，線維症32%であった．同様の傾向は脾腫と肝組織像との関連でもみられる．すなわち高い Splenic Score を示す男性例で肝障害度の高い例は肝硬変症の合併のためであり，この合併例を除くと性差がなくなる．以上，脾疾患の診断には ^{131}I MIAA 法が ^{198}Au 法より有用であり，日住症においては男性では肝硬変症の合併例が多く，女性では高度の肝障害のない例が多いが脾腫を伴う症例が多いことが分った．

Presented by Medical*Online